中日新聞（夕刊）　2012. 08. 31.

聞こえなくても心は通う

映像作家 今村彩子さん

湖西・太田さんとの出会い 転機

耳が聞こえない「ろう者」や難聴者に焦点を当てた作品を製作している映像作家の今村彩子さん＝名古屋市緑区で

名古屋市の映像作家今村彩子さん(三三)は、耳が聞こえない「ろう者」や難聴者にスポットを当てた作品を製作している。生まれつき耳が聞こえず、社会との壁を感じたこともあったが、今は「聴者（耳が聞こえる人）との懸け橋になりたい」と迷いなくカメラを回す。

映画と出会ったのは小学生の時。テレビ番組を楽しむことができない今村さん。父親がスティーブン・スピルバーグ監督の「E・T」の字幕付きビデオを借りてきた。初めて内容を理解でき「自分も勇気や元気を与えられるようになりたい」と映画監督の夢を持った。

大学在学中、映画製作を学ぶため米国に留学。二十歳の時に初作品を撮って以来「ろう者のことを知ってほしい」と、母校の特別支援学校や、ろう者が聴者と一緒に働くドキュメンタリー映画を次々と完成させた。

しかしその間も聴者との間に壁を感じていた。「筆談など、ろう者とのコミュニケーション手段を面倒と思われるのが嫌だった」と、積極的に話し掛けることをためらった。

変わるきっかけは三年前の映画を通じた出会いだった。湖西市でサーフショップを営むろう者の太田辰郎さん(五〇)が手話、ジェスチャー、筆談、声とあらゆる手段で誰とでも会話を楽しむ姿にひきつけられ、撮影を始めた。

撮影の合間に、心境に変化があった。「壁をつくっていたのは自分で、気持ち次第でなくなるものだ」。積極的に聴者に話し掛けるようになり「自分の言葉で伝えたい」と初めてナレーションにも挑戦した。

創作意欲は尽きず、今は群馬県に住む、ろう者の妻、聴者の夫と一歳の子どもの日常を撮影している。「心の壁も物理的な壁も、自分が伝えていくことでなくなっていけばいいな」。手話をまじえ、穏やかにほほ笑んだ。